

位置変化の始発点を示すカラとヲ

藪崎 淳子

1. はじめに

本稿で考察するのは、次のようなカラとヲについてである。

(1) 街 {から／を} 去った。

(1)のカラ・ヲは、場所名詞に接続し、移動性の述語と結びついている。そして、カラ・ヲのいずれの場合も、主体が移動することで、主体と「街」が隔たることを表す。つまり、カラとヲは、「街」のように、移動主体の動きによって、移動主体との間に隔たりが生じる場所、即ち「位置変化の始発点」を示し得るといえる。(以下、「カラ」と「ヲ」は当該用法のものを指す)。しかし、両助詞は常に同じく始発点を示せるわけではない(杉本1986、寺村1989、三宅1995、加藤2006など)。

(2) 会社 {から／*を} 帰った。

(3) 現場 {から／*を} 逃げた。

(4) 目 {から／*を} 涙がこぼれた。

(5) 眼の前 {から／*を} いなくなった。

(6) 成田ではなく羽田 {から／??を} 出発した。

(7) 大学 {から／#を} 出た。

(2)～(6)は場所名詞に接続し、移動性の述語と結びついているものの、ヲの許容度が(1)とは異なる。また、(7)は両助詞ともに許容されるものの、カラは「大学の外に移動する」という物理的な移動の始発点を示しているとしかとれないのに

対し、ヲは「卒業する」という抽象的な移動の始発点を示しているとの解釈も成り立つ。(2)～(7)に見られるように、カラとヲが位置変化の始発点を示すには、場所名詞に接続して移動性の述語と結びつくという以外にも、一定の条件が整わなくてはならず、その条件はカラとヲでは異なる。その条件の差異を明らかにすることが、本稿の目的である。

2. 移動性述語の性質

2.1 経路を示すヲ

カラとヲの相違を考察する前に、本節では移動性述語の性質について考える。それは、ヲは結びつく述語によっては、そもそも始発点を示し得ないからである。

(2a) 山道を帰った。

(3a) 山道を逃げた。

(4a) *運搬路を商品がこぼれた。

(5a) *山道をいなくなった。

(6a) *下り坂ではなく上り坂を出発した。

(2a)(3a)は線的な場所である「山道」が前接すると、そこが移動の経路と捉えられ、ヲが許容される。これに対し、(4a)～(6a)は線的な場所を表す語が前接してもヲは許容し難い。このことから、(2)(3)においてヲが始発点を示し得ないのは、「帰る」「逃げる」と結びつくヲは経路

を示すためだと考えられる。一方、(4)～(6)の述語は経路を示さず、ヲがなじみにくい理由は(2)(3)とは別である。こうした差を考慮しなくては、始発点を示すカラとの差も分からないことから、ヲがどのような移動性述語と結びつく場合に経路を示して、始発点を示し得ないのかを考える必要がある。なお、川野(2001: 34)は、ヲが経路を表す「動詞句は基本的にAtelicである」と述べる。しかし、(3a)の「逃げる」の他、「(山道を)歩く」「(山道を)走る」といった非内的限界動詞だけではなく、(2a)の「帰る」の他、「(山道を)行く」「(山道を)来る」などの内的限界動詞と結びついても経路を示す場合がある。つまり、ヲが経路と始発点のいずれを示すのかは、述語の限界性の有無では説明できない。

2.2 動作過程の有無

結論を先取りする形になるが、ヲが経路を示すか否かは、述語の表す移動動作に、動作過程が有るか無いかによるものである。ここで述べる動作過程とは、1回の運動の開始から終了に至る間の動作継続を指し、多回的な運動の継続とは別である。

まず、経路を示す(2a)(3a)の述語から見よう。(2)の「帰る」は、開始限界を超えた後、「帰った」といえる状態に至るまでには動作が継続する過程がある。同じく(3)の「逃げる」も、開始限界を超えた後、どこかに到達して動作が終了するまでには、一定時間動作が継続する過程がある。一方、経路を示さない(4a)～(6a)の述語を見ると、(4)の「こぼれる」は、商品が運搬路を離れた瞬間に「こぼれた」

といえ、開始限界と終了限界がほぼ同時である。もちろん、「こぼれつづける」こともあるが、それは「複数の商品がこぼれる」など、多回的な動作の継続であり、1回の動作の開始から終了に至る継続、即ち本稿でいう過程ではない。同じく(5)の「いなくなる」も、その場から姿が見えなくなると同時に「いなくなった」といえ、開始から終了に至るまでの過程はない。また(6)の「出発する」も、始発点から一歩離れた瞬間に「出発した」といえ、やはり動作が継続する過程はない。

このように、(2)(3)と(4)～(6)の述語の性質が異なることは、次のテストから分かる。

(2b) {道に迷いながら／脇目もふらず／10分で} 帰った。

(3b) {道に迷いながら／脇目もふらず／10分で} 逃げた。

(4b) #10分でこぼれた。

(5b) {*道に迷いながら／*脇目もふらず／#10分で} いなくなった。

(6b) {*道に迷いながら／*脇目もふらず／#10分で} 出発した。

「道に迷いながら」「脇目もふらず」は移動の開始から終了に至る過程の様態を表すものである。(2b)(3b)はいずれが共起しても自然であるのに対し、(5b)(6b)はいずれもなじまない。このことから、(2)(3)の「帰る」「逃げる」には修飾可能な動作過程があるのに対し、(5)(6)の「いなくなる」「出発する」にはそうした動作過程がない点で異なることが分かる¹⁾。次に、「10分で」との結びつきを見よう。(2b)(3b)は「帰る」「逃げる」という1回の動作の開始から終了までが「10分」との解釈が成り立つ。これに対し、(4b)

～(6b) は1回の動作の開始までが「10分」であることを表し、開始から終了までが「10分」であるとの解釈は、「複数の商品がこぼれる」「全員なくなる」など、多回的な動作の場合でなくては、成り立たない。このことも、(2)(3)の述語は時間限定できる動作過程があるのに対し、(4)～(6)の述語はそうした動作過程がない点で異なることを裏付ける。ちなみに、ヲで始発点を示す(1)(7)の「去る」「出る」も動作過程はなく、(4)～(6)と同種である。

このように、ヲは動作過程のある述語と結びつくと、経路は示し得ても、始発点は示さないのに対し、動作過程のない述語と結びつくと、経路を示すことはなく、始発点を示し得る場合とそうでない場合がある。カラとの差異を明らかにすべく、次節では、述語を動作過程の有無によって二分類して考察する²⁾。

3. カラとヲの相違点

3.1 動作過程のある述語と結びつく場合

3.1.1 ヲの場合

(2)(3)のように、このタイプの述語と結びつくと、ヲは始発点を示すことはできず、(2a)(3a)のように経路であれば示し得る。ただし、このタイプの述語と結びつけば常に経路を示せるわけではない。「山道」など、経路として解釈し得る線的な場所名詞をとらなくてはならず、経路を示し得るか否かには前接名詞の語義も関わっている。なお、ここまで述べなかったが、「歩く」「走る」など、移動様態を表す述語と結びつくと、ヲは経路の他、動作を行う場所を表すこともある。

(8a) 山道を歩いた。

(8b) 公園を歩いた。

(8)のヲは、aの「山道」のように線的な場所を表す名詞に接続すると〈経路〉を表し、bの「公園」のように線的ではなく、明確な場所性を有する名詞に接続すると〈動作の場所〉を表す³⁾。

ヲが示す〈経路〉と〈動作の場所〉は、一見大きく異なるかに思われよう。しかし、いずれも一定時間同じ動作を継続する場所である点では共通する。ここで見ている述語は動作過程を有することから、ヲはその性質と連動し、継続的な動作を行う場所である〈経路〉、あるいは〈動作の場所〉を示すのであろう。そして、「帰る」であれば“元の場所へ”、「逃げる」であれば“いた場所から遠ざかる”といった、方向性のある移動を表す述語と結びつく場合は、その方向性故に〈経路〉しか示し得ない。一方、「歩く」など移動様態を表すのみで、方向性のない述語と結びつく場合は、前接名詞の語義によって〈経路〉と〈動作の場所〉のいずれも表すのだと考えられる。ここまで述べたことを整理すると、次の通りである。

【表1】動作過程のある述語と結びつくヲ

用例	移動の方向性	線的な場所	ヲの意味
(2)(3)	+	-	経路
(2a)(3a)	+	+	経路
(8a)	-	+	経路
(8b)	-	-	動作の場所

3.1.2 カラの場合

カラはヲと異なり、述語や前接名詞のタイプを問わず、常にその場は始発点となる。

(2c) {会社/山道} から帰った。

(3c) {現場/山道} から逃げた。

(8c) {公園/山道} から歩いた。

その理由は、カラが位置変化の達成を表すためであると本稿は考える。(2)の「帰る」は限界性を有し、動作の終了後には位置変化することを表す。そのため、「山道を帰った」と言えば、動作の終了後には「山道」とは異なる場所へ移動することを表す。しかし、「山道を帰る途中」は「山道」に存在することを表すのに対し、「山道から帰る途中」は「山道」とは別の場所に存在していることを表す。つまり、ヲは動詞に内在される終了限界に達しなくては、前接名詞の表す場所から他の場所への位置変化を表し得ないのに対し、カラは動詞に内在される終了限界に達せずとも位置変化を表す。こうしたカラとヲの差は、非内的限界動詞と結びつく(8)に明確にあらわれる。ヲの場合、その動作を1時間継続しても、移動主体は依然として「公園」、あるいは「山道」に存在している。しかし、カラであれば、その動作がたとえ5分でも継続した後は、前接名詞の表す場所とは別の場所に到達する。このように、カラは位置変化の達成を表すため、指し示す場所は、移動動作を継続する場である〈経路〉や〈動作の場所〉ではあり得ず、位置変化の基準である〈始発点〉となるのである。

このように、カラが位置変化の達成を表すことは、次の例からもいえる。

(9) 公園から子供をおんぶした。

(10) 遊園地から子供を列車に乗せた。

(9)の「おんぶする」、(10)の「乗せる」は、本来移動を表す述語ではない。にもかかわらず、(9)は「子供をおんぶした」状態で「公園」とは別の場所へ移動したことを含意している。このことは、「公園で子供をおんぶした」では、別の場所へ移動

したか否かを含まないのと比較すると分かりやすい。(10)も「子供」が乗ったのは遊具の「列車」ではなく、「遊園地」とは別の場所へ移動する「列車」であると捉えられる。それは、カラが位置変化の達成を表すために、述語の語義とは関係なく、それが示す始発点とは異なる場所への移動が含意されるからである。「ここからどのぐらいかかりますか」「駅から遠い」などに、ヲではなくカラが用いられるのも、カラは述語の語義とは無関係に位置変化の達成を表し、始発点から隔たることを含意するため、隔たりの量を測る「かかる」「遠い」などの語義となじむからであろう⁴⁾。

3.1.3 まとめ

以上見てきたように、動作過程のある移動性述語と結びつく場合、ヲは述語の性質と連動し、動作を継続する場所を表す。方向性のある移動を表す述語と結びつく場合は〈経路〉を、方向性のない移動様態を表す述語と結びつく場合は〈経路〉、あるいは〈動作の場所〉を、前接名詞の語義と関って表す。一方、カラは位置変化の達成を含意するため、前接名詞や述語の性質を問わず、常に〈始発点〉を示し得る。

3.2 動作過程のない述語と結びつく場合

3.2.1 ヲの場合

(1)(7)のように、このタイプの述語と結びつくと、ヲも始発点を示すことができる。ただし、(4)~(6)の他、次のような例もあり、このタイプの述語と結びつけば常に始発点を示し得るわけではない。

(1a) 山道 {から / *を} 去った。

(7a) 山道 {から / * を} 出た。

(11) 客が非常口 {から / * を} 飛び出した。

では、ヲはどのような場合であれば、始発点を示し得るのであろうか。

まず、(1)(7) と (1a)(7a) を比べてみると、場所名詞に差がある。(1a)(7a) の「山道」は線的であるのに対し、(1)(7) の「街」「大学」は線的ではなく、広がりはある、点として捉え得る場所である。このことから、ヲは点的に捉え得る場所ではなくては、それを始発点として示し得ないことが分かる。ただし、(4)～(6)(11) は点的に捉え得る場所名詞に接続しているにもかかわらずヲはなじみ難しく、ヲで始発点を示すには、前接名詞の語義以外にも何らかの条件が整っていない。

三宅 (1995 : 69) は (4) にヲがなじまないのは、「意志的にコントロールされない移動の場合はヲ格を使うことはできない」からである、と述べる。しかし、

(12) 父は早朝の散歩中に交通事故でこの世を去った。

(朝日新聞2010/2/28)

のように、ヲが無意志的な移動の始発点を示すこともある。また、(6) のヲの許容度が低い理由について、影山 (1980)、三宅 (1995)、加藤 (2006) などは、始発点に焦点がある、あるいは始発点を選択する場合にヲは用いられ難いからであると論じている。しかし、

(13) 新宿駅東口を出てすぐ

など、複数の候補から選択していると捉えられる場合にヲが用いられることもある。従って、ヲが始発点を示すための条件は、先行論とは別の観点から考える必

要がある。

その条件を考える上で注目したいのは、ヲは経路も示し得ることである。経路とは、移動主体が方向性のある移動を行うために存在する場所である。ヲの示す始発点もまた、移動主体が方向性のある移動を行うために存在する場所ではなくてはならないのだと考える⁵⁾。(1)であれば、移動主体は動作の開始以前には「街」に存在し、そこで「去る」という動作を行う。この「去る」という動作には、その場から遠ざかっていくという方向性がある。(7) も、「大学」に存在していた主体が、新たなところへ向う「出る」という動作を行う。もちろん方向性があるといえ、「家を出てすぐ立ち止まった」など、必ずしもどこかへ到達することを含むわけではない。しかし、結果がどうであれ、「(家を) 出る」のはそこを離れて遠ざかるためであり、動作そのものには方向性がある。

このように、ヲが始発点を示す場合は、①前接名詞の表す場所が点として捉え得ることに加え、②移動主体が存在する場所であること、③移動に方向性があること、という3つを満たしている。そして、①～③のいずれが欠けても、ヲは始発点を示し難い。(1a)(7a) が①を欠くために、ヲで始発点を示し難いことは先に述べた通りである。一方、(4)～(6) にヲがなじまないのは、③を欠いているためである。(4) は「目」という点的な場所に移動主体の「涙」が存在することを表しており、①②は満たす。しかし、「こぼれる」は出現を表すものであって、その場から遠ざかったり、どこかへ向ったりという動きではないことから③を欠く。(5) も

「眼の前」という点的に捉え得る場に移動主体が存在していたことを表し、①②は満たしている。しかし、これは消滅を表すものであり、「いなくなった」後の主体の動作は不問に付されているため、移動に方向性がなく、③を欠く。(6)は点として捉え得る「羽田」に存在する移動主体が「出発する」という動作を行うことを表す。この「出発する」には、目的地へ向うという方向性があり、①～③のいずれも満たしているかに見える。しかし、(6)は始発点を選択することに主眼があり、移動動作そのもの、即ち移動の方向性には重きがおかれていない。そのため、③を十分に満たせずヲの許容度が下がるのだと考えられる。これらに対し、(11)は②を欠くためにヲがなじまない。「非常口」は点的な場所として捉えられ、また「飛び出す」にはその場から遠ざかるという方向性もあり、①③は満たす。ただし、「(非常口を)飛び出す」の場合は、「(家を)飛び出す」や「(非常口を)出る」とは異なり、別の場所から駆けて来て「非常口」を通過し、新たな場所に至るという動作が想起される。そのため、(11)の「非常口」は動作の開始以前に主体が存在する場所であるという含意がなく、②を満たせないことからヲを用いることはできないのである。「*家の中を出た」といえないのも、②によりヲが示すのは主体の存在場所と捉えられるため、「家の中」に存在していることと、別の場所に向って移動することを表す「出る」の語義が齟齬するからである。また、

(14)どこ {から / ??} を出発しますか。など、不定語と結びつく場合にヲの許容度が下がるのも、不定の場所では、そこ

に移動主体が存在するという含意がなく、②を十分に満たせないためであろう。ここまで述べたことを整理すると、次の通りである。

【表2】ヲと動作過程のない述語との結びつき

用例	①点的な場所	②主体の存在場所	③移動の方向性	ヲの意味
(1)(7)(12)(13)	+	+	+	始発点
(1a)(7a)	-	+	+	始発点
(4)(5)(6)	+	+	-	始発点
(11)(14)	+	-	+	始発点

3.2.2 カラの場合

従来、カラについては、始発点に焦点がある場合、あるいは始発点を選択する場合に用いられるとされている(影山1980、三宅1995、加藤2006など)。確かに、(6)(14)など、始発点を他と区別して選択する場合はカラを用いることが多い。とはいえ、カラのみが始発点の選択を表し、ヲはそれを表さないと考え難い。それは、先の(13)の他、

(7)彼はA大学ではなくB大学 {から / #} を出たそうだ。

のように、他の選択肢を排除し、始発点を選択する場合にヲを使用することもでき、始発点の選択がカラに特有の意味とは言い難いからである。もちろん、(7)など、カラは選択を表す際に用いられるのではあるが、しかしそのことだけでは、このカラが物理的な移動の始発点を示しているとしか解釈できない理由は分からない。このカラが「卒業する」という意を表し得ない理由については、三宅(1995)に、「物理的な移動ではない場合」カラを用いることはできないためである、とある。しかし、カラは抽象的な移動の始発点を示すこともできる⁶⁾。

(15)滝沢選手はレース後、競技の第一

線から退く意向を明らかにした。

(朝日新聞2010/2/23)

また、「卒業する」と結びつくカラの例もある。

(16) フジテレビの中野美奈子アナウンサー (29) が27日、担当していた同局系「めざましテレビ」(月～金曜前5・25)から卒業した。

(産経ニュース2009/3/27)

(17) 斎藤祐樹が“祐ちゃん”から卒業する日…

(産経ニュース2011/1/11)

従って、先行論の記述からは、なぜ(7)のカラが抽象的な移動の始発点を示し得ないのかは分からない。では、(7)と(16)(17)にはどのような差があるのであるうか。

(7)の表す「大学の卒業」は、主体が大学生ではなくなることを表すのであるが、それは決して「大学をやめる」ことを意味するわけではない。一方、(16)の「めざましテレビの卒業」は、主体が番組の担当ではなくなることを表し、これは「めざましテレビをやめる」と同義である。(17)は「祐ちゃん」と呼ばれ、皆に見守られる存在から、プロとして一人前になることを意味するものといえ、「祐ちゃん」と呼ばれる状態や、キャラクターを「やめる」ことを意味する。このように、同じ「卒業する」でも、(16)(17)は「やめる」と同義の、言わば所属先から完全に切り離されることを表すのに対し、(7)は「やめる」のような所属先から切り離されることを意味するものではない。つまり、(7)は所属先である始発点と主体が切り離されないのに対し、(16)(17)は始発点と主体が切り離される点で異な

る。従って、カラは主体が始発点から切り離されなくてはならないために、(7)で「卒業する」という意を表せないのだと考えられる。一方、ヲは先の①～③を満たせばよく、主体と始発点が切り離されるか否かは問わないことから、(7)において物理的移動と抽象的移動のいずれの解釈も成り立たせることができるのである。

カラの場合、主体と始発点が切り離されなくてはならないことは、次の例からも分かる。

(18) 現場{*から/を}後にする。

(19) *耳元から叫んだ。

(18)の「後にする」は、その語義によって主体の背後に始発点が存在するといった情景が想起される。そのため、主体が始発点と切り離されていないと感じられ、カラとなじまないであろう。(19)も情報の始発点の「耳元」と到達点の「耳」の間に物理的な隔たりがほとんどないため、移動主体である情報が「耳元」と切り離されたとは捉えられず、カラの性質と相容れないのだと説明される。

では、なぜカラは移動主体が始発点と切り離されなくてはならないのであろうか。それは、3.1で見たカラと同様、本節で見ているカラも位置変化の達成を含意しているためであると考えられる。もちろん、両者には動作過程の有無という点で、述語の性質に差はある。その差により、ヲの場合は始発点を示し得たり、示し得なかったりするものの、カラは位置変化の達成を表すため、述語の性質を問わず、始発点を示すことができ、またその語義故、主体が始発点から切り離されない場合にはなじまないのである。カラにこう

した性質があることはまた、ヲと異なって「いなくなる」などとの結びつきが可能なこととも無関係ではなからう。これらは「出発する」などと異なり、移動に方向性がなく、動作の終了後の動きは不問に付されている。しかし、カラはそれ自体で位置変化の達成を表し、「いなくなる」の語義には含まれない別の場所への移動も含意する。そのため、示す場が位置変化の始発点と捉えられるのである。

3.2.3 まとめ

以上見てきたように、動作過程のない述語と結びつく場合、ヲは点的に捉えられ、かつ移動主体が存在する場所において、方向性のある移動を行う場合でなくては始発点として示せない。一方、カラは位置変化の達成を含意するため、動作後に主体がその場から切り離されさえすれば、前接名詞や述語の語義に左右されず、始発点として示し得る。

4. おわりに

カラとヲが位置変化の始発点を示す条件の差異を考察した。ヲは動作過程のある述語と結びつくと、動作継続の側面と連動し、動作継続に関わる経路、あるいは動作の場所を示す(表1)。一方、動作過程のない述語との結びつきにおいては、点として捉え得る場所に移動主体が存在し、そこで方向性のある移動動作を行う場合は、その場が位置変化の始発点と捉えられる(表2)。これに対し、カラは位置変化の達成を含意するため、主体がその場から切り離されさえすれば、前接名詞や述語の語義の影響を受けず、常に位置変化の始発点を示し得る。

総じて、ヲは主体が存在して動作を行う場所を示すに留まり、前接名詞と述語が、点的な場所と捉えられることと、位置変化の達成が含意されることを保証する場合に、その場が位置変化の始発点と捉えられるようになる。これに対し、カラはそれ自体に位置変化の始発点を示す機能がある。この差が何を意味するのかは、今後の課題である。

注

- 1) (4)の「こぼれる」も「道に迷いながら」「脇目もふらず」と共起しない。しかし、それは動作過程がないためだけではなく、無意志動作を表す述語と、意志動作の様態を表す修飾句がなじまないためでもあることから、ここではテストしない。
- 2) 本稿が提示する移動性述語の二分類は、藪崎(2009)と同じ観点によるものである。川端(1967: 31)の、ヲの示す始発点は「位点移動のプロセスを捨象した、言わば原点的な場所」であるとの記述は、(1)(4)～(7)の述語の性質について本稿が言わんとするところと同じと理解される。なお、本稿でいう動作過程の有無は、テイル形の意味の差には対応しない。「帰る」「来る」は、テイル形で動作過程を表せない点では、「歩く」「走る」と異なり、「発つ」「着く」と同類である。一方、動作過程の有無では、「帰る」「来る」は「発つ」「着く」とは異なり、「歩く」「走る」と同類である。このことは、金田一(1947)が、「帰る」「来る」などが継続動詞と瞬間動詞にまたがるのと同じである。

3)「{?家/家の中}を歩いた」に明らか
ように、動作の場所は線的な場所では
ないこと、他、場所性が明確であるこ
とも必要である。

4) 非内的限界動詞が動作の達成を表す
には、量を表す語句による限界づけ
が必要である。このことに鑑みると、
(8c)の「歩く」との結びつきでも位置
変化の達成を表し得るのは、カラが移
動動作の量を表しているためであると
考えられる。上野、影山(2001: 62)に、
英語の移動様態動詞はそれ自体では
「非有界、非完結的」でも、「着点ないし
起点をつけることによって、有界的な
事象に変えることができる」とあるが、
日本語のカラ・マデにも、非限界の動
作を「有界的な事象に変える」働き、即
ち動作の量を表す性質があると考えら
れる。

- He ran 200 meters to the station.
(上野、影山2001: 63の(56) b)
- She ran out of the room.
(上野、影山2001: 62の(51) a)

また、上野、影山(2001: 53)に、「基本
的には位置変化を含意しない」英語の
動詞でも、「着点や起点をつけること
によって移動の意味を担うことができ
る」とある。日本語も(9)(10)の他、「新
宿 {から/まで} 乗った」のように、カ
ラ・マデによって移動を表すことがあ
り、英語と平行的に捉えられる。なお、
マデに関する議論は数崎(2009)を参
照されたい。また、主張に異なるところ
はあるものの、始発点・到達点を示
す助詞が量を表すとの見方は、小柳
(1999, 2011)にもある。

5) 3.1で述べたように、ヲは動作の場所

も表す。動作の場所も、主体の存在場
所である点では、経路、始発点と変わ
らない。ただし、方向性のある移動の
含意が必要か否かという点では、当該
用法のヲは経路・始発点を示すヲとは
異なる。この差は、動作の場所は位置
変化が生じないのに対し、経路・始発
点は位置変化を前提とした動作を行う
場所だからであり、動作の場所を表す
ヲが異質なわけではない。なお、ヲが
移動主体の存在場所を示すという考え
は、杉本(1986: 314)の、ヲは「名詞句
で示される領域内での移動が必要であ
る」とする議論に発想を得た。

6) 影山(1980: 47)にも「“抽象的な移動
は「を」を要求する”のようには一般化
できないことに注意しなければならない
」とある。影山は、(7)のヲが「卒業
する」という意を表すのは、ヲの「起点
名詞の本来的機能に言及する」性質に
よると述べる。これは、「大学」の“学問
を修める場”といった「機能に言及」す
るため、ヲが「卒業する」という意を表
し得るとの主張と理解され、(7)の説
明としては納得できる。しかし、(1)に
おいてヲは「起点名詞の本来的機能に
言及」し、カラはそうでないのか、また、
(11)にヲではなくカラが用いられる
理由が「起点名詞の本来的機能に言及」
していないためなのかなど、影山の議
論によってカラとヲの差が統一的に説
明できるのかは疑問である。

参考文献

上野誠司、影山太郎(2001)「移動と経路
の表現」『日英対照 動詞の意味と構
文』大修館書店

- 影山太郎 (1980)『日英比較 語彙の構造』松柏社
- 加藤重広 (2006)「対象格と場所格の連続性—格助詞試論 (2) —」『北大文学研究科紀要』118
- 川野靖子 (2001)「ヲ格句を伴う移動動詞句について—アスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけ—」『日本語と日本文学』33、筑波大学
- 川端善明 (1967)「場所方向の副詞と格 (上) —述語の層について その二—」『国語国文』36-1
- 金田一春彦 (1947)「国語動詞の一分類」(『日本語動詞のアスペクト』(1976) むぎ書房所収)
- 工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 小柳智一 (1999)「中古のマデ—第一種副助詞—」『国語学』199
- 小柳智一 (2011)「古代の助詞ヨリ類—場所格の格助詞と第1種副助詞—」『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版
- 杉本武 (1986)「格助詞—「が」「を」「に」と文法関係—」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 杉本武 (1995)「移動格の「を」について」『日本語研究』15、東京都立大学
- 寺村秀夫 (1989)「意味研究メモ その1」『阪大日本語研究』1
- 仁田義雄 (1980)『語彙論的統語論』明治書院
- 仁田義雄 (1983a)「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学』2-10
- 仁田義雄 (1983b)「動詞とアスペクト—語彙論的統語論の観点から—」『計量国語学』14-3
- 仁田義雄 (1997)『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版
- 三宅知宏 (1995)「ヲとカラ—起点の格標示—」『日本語類義表現の文法 (上) 単文編』くろしお出版
- 三宅知宏 (1996)「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110
- 森山卓郎 (1983)「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢』17、大阪大学
- 藪崎淳子 (2009)「格助詞マデ」の副助詞性について」『日本語文法』9-2
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press

用例出典

- 『聞蔵Ⅱ』
『産経ニュース』(<http://sankei.jp.msn.com/>)

(大阪大谷大学非常勤講師)